

第1回日本予防医学リスクマネジメント学会学術総会の会議概要

第1回日本予防医学リスクマネジメント学会学術総会は2003年3月27日-28日に国立国際医療センターおよび国立感染症研究所にて「予防医学におけるリスクマネジメント学の枠組」を主要課題として開催されました。結論として報告すべき点は、会議後直ちに、ウクライナでの原子力安全に関する学際シンポジウム、ロシアでのコンピューター支援リスクマネジメントシステムに関する特別会議、コスタリカでのラテンアメリカ会議、クロアチアでの食品衛生と安全に関する会議、マレーシアでの第2回アジア太平洋会議、2007年の国際学会総会、学術雑誌「Health」の刊行といった世界規模での発展が次々に発生していることです。また、日本でも第2回年次総会の開催、各種分科会の開催、各種委員会の拡充といった新しい展開が会員各位の指示と協力を得て動き出しました。また、国際学会のアフリカ支部としてURMPM Africaが3日前に結成されたとの報告も南アフリカより受けました。

さて、この総会は日本予防医学リスクマネジメント学会が母体となって2002年に発足した国際予防医学リスクマネジメント連盟(理事長酒井亮二、会長Stephan Morgenthaler)、アジア太平洋防医学リスクマネジメント学会(会長R.B.Nordin)、太平洋防医学リスクマネジメント学会(会長酒井亮二)、マレーシア防医学リスクマネジメント学会(会長R.B.Nordin)およびウクライナ防医学リスクマネジメント学会(A. Pivovarov)の合同会議として開催し、日本学会を含むすべての学会の第1回総会を兼ねる形式で行いました。この合同会議の最終プログラムは下記のホームページに掲載したとおりであり、酒井亮二国際会議代表会長、丹羽真一国際プログラム委員会委員長(日本学会副理事長)、白川太郎国際組織委員会委員長(同)、白川太郎国際募金委員会委員長、大森正英国際実行委員会委員長(日本学会理事)、若杉なおみ国際会場運営委員長(同)、杉田稔国際会議広報委員長(同)、後藤章暢日本学会事務局長などによって運営されました。

<http://plaza.umin.ac.jp/~jsrmpm/TokyoConf/index.html>

日本側参加者は100名以上です。JICAによる研修生およびイラク戦争の開始直後であったために不参加者(2名)を除き、海外参加者の内訳はオーストラリア(1名)、コスタリカ(1名)、フランス(1名)、ドイツ(3名)、香港(1名)、韓国(6名)、マレーシア(5名)、フィリピン(1名)、ネパール(1名)、ロシア(2名)、シンガポール(1名)、南アメリカ(1名)、スウェーデン(3名)、スイス(6名)、タイ(3名)、イギリス(3名)、ウクライナ(2名)および米国(4名)でした。このうち自費参加者を除く海外招待者が合計31名でした。これらの方々により、記念講演(日本国厚生労働省大臣、日本医師会医療事故対策担当理事およびASEAN健康開発センター前所長)、4種類のシンポジウム、教育講演、10種類のパネルおよび9種類のワークショップが基調講演、特別講演ないし一般講演の形でホームページに掲載した各演題として発表いただきました。会議は全体として予防医学におけるリスクマネジメント学のあり方を検討するために、関連する研究分野の現状の整理を行い、最終の学際シンポ

ジウムでは各座長によるサマリー報告をいただきました。各座長のサマリー報告の提出は本会議が国際会議でもあるために英文での報告を中心に願いし、それらを国際学会のホームページに掲載をしています。会議の期間中、日本学会としては理事・幹事会と広報委員会を単独で行い、最終日の最後に総会を各学会と合同で開催しました。国際学会としては、国際編集委員会の準備会、国際学会役員会(海外からの招待者全員および各学会の会長が参加)および合同総会を開催した。それぞれについては当該の会議報告を参照していただきたい。

以上の討議の他に、国際会議であるためにレセプション(3月26日)、バンケット(3月27日)および解散会(3月28日)が開催された。その他にサテライト・シンポジウム3件が本会議の前後に開催された。また、海外参加者の中から希望者30名以上による都内招待観光バスツアーを29日午前中に行い、その後京都に新幹線で移動した。京都大学でのサテライトシンポジウム(30日)の後に、京都市内招待観光が31日に行われました。京都サテライト・シンポジウムの開催責任者であった白川太郎教授およびその運営を強靱に補佐した山崎暁子先生の膨大な努力が東京と京都での会議の開催には不可欠でした。これらを通じて海外からの参加者は日本滞在を大変満足されましたが、日本側参加者数が少なかった点が今回全体を通じて唯一の問題点です。これは予算の関係上正式なポスター印刷が3月上旬であったことによるものであるとの分析もありましたが、最近の日本経済の悪化が高額な会議への参加を控えさせたことにも1因があり、海外参加者にはその点を説明し了承されています。

以上全般的には東京と京都での強力な協力関係によって、すべての会議とその関連行事の運営は盛会に完了しました。会議のテーマであるリスクマネジメントの学問的枠組については会議を通じて繰り返し討議されたが、明解な最終結論を得られず、それぞれの参加者が今後継続して検討する課題となっています。筆者個人としては、リスクマネジメントは不確実なリスクの世界における限りある資源による有効な対策の策定、実施、その実証的評価及び対策策定へのフィードバックという確率論的なリスク経略のサイクルであり、その中心概念は人間-環境系であると考えに至りました。そして、予防医学のリスクマネジメントは基礎、臨床および社会医学の全分野にまたがり、医学以外の他分野の協力を得て発展することができることを再確認できました。このように医学のリスクマネジメント学は学問として始まったばかりであり、その中心課題の検討を含めて学際研究が必要であることは海外からの参加者全員からつよく表明され、それに向かって今後の協力体制と学問的競争が始まりました。このことから、予防医学を志向するリスクマネジメント学の世界レベルでの展開を開始するという、本会議開催の発端者としての所期目的を最大限に到達できたと確信します。

会議自体の詳細報告については国際会議でもあったので、国際学会に対する英文報告書を参照していただき、ここでは割愛します。最後に、日本の関係者各位およびこの会議の医学的意義を認めて超多忙の中を参集された多数の日本と世界の方々に深く感謝いたします。会議の運営経費は参加費以外に、会議開催へ寄付を賜りました様々な団体(日本製薬工業界、各種の食品メーカー、日本機能性食品工業会、TTC社、健康ウェルネスの森、製薬メーカー各社の京都支店など)および個人の方によるものであり、各位に深く感謝申し上げます。

げます。

以上をまとめますと、この学会は今日の世界の医学が抱える巨大な未解決の問題に対する世界規模での挑戦の始まりであり、世界最初の会議開催という困難な運営作業をわずか 10 ヶ月で成し遂げた日本の関係各位に対し感謝の意に代えてご報告します。なお、発表者によって寄稿された論文は 2003 年内にスイスより刊行する予定です。日本学会では第 2 回総会として臨床予防リスクマネージメント学を中心に深く討議をすすめ、国際学会では 2004 年 4 月末の特別会議(開催地コスタリカ)にてリスクマネージメント学の基礎理論開発にテーマを移行します。

第 1 回日本学会学術総会会長 酒井 亮二
日本予防医学リスクマネージメント学会理事長、
国際予防医学リスクマネージメント連盟理事長
2003 年 5 月 13 日